

**論文題目：閣臣李賢と明代天順期内閣政治の研究**

氏名：宋宇航

明代内閣政治史は、中国語圏では非常に人気の高い研究テーマであり、毎年公表される各大学の修士論文まで含めれば、研究成果は現在もなお増加の一途を辿っていると言っ  
てよい。

明代の内閣についての代表的な研究成果として杜乃濟・王其榘・譚天星・洪早清四氏の著作が挙げられる。まず、杜乃濟氏による内閣の概説は緻密な考察とは言えないものの、後の研究に指針を与えたという点で大きな意義をもつ。王其榘氏の研究は杜氏と比べて詳細であり、特に各皇帝の治世をもとに内閣の時期区分を提示したことで、内閣制度の発展過程を容易に把握することが可能となった。しかしその一方で、王氏は内閣の積極的な歴史意義を否定してしまった。さらに問題なのは、王氏が内閣の権力拡大・地位の向上と、中央の政策決定に内閣が果たした役割を無視したことである。それ故、譚天星氏による批判を招くことになるのである。譚氏の研究こそ内閣の宰相化への傾向を分析することで、研究水準を一挙に引き上げたのであった。また、譚氏は内閣の制度自体を分析しただけではなく、閣臣を考察対象にするという新たな研究分野を開拓し、洪早清氏がこれを継承した。洪氏は内閣について制度面よりもむしろ、個々の「閣臣」の存在に注目し、彼らの動きを通して明代政治社会の把握を目指した。しかし、洪氏の論著は事例分析に止まっており、譚氏の示した閣臣の「宰相化」という枠組みを乗り越えていない。また、これは譚氏・洪氏に共通する問題であるが、多くの論点を提示するものの、史料にもとづいた考察が不足し、史料的な裏付けを欠いているケースがまま見られる。また、ほかにも、明代の内閣政治全般に及ぶ研究はあるが、その観点と叙述方法は四氏の考察を大きく超えるものではない。

一方、内閣の職掌・制度・性格などの個別のテーマについて大量の研究成果が蓄積されているが、ここにも大きな問題が存在している。田澍氏は「動態式」研究の成果に乏しいことを問題視し、孫熙隆氏も「動態的（式）」角度からの分析・論証が不十分であるために、現在の停滞状態がもたらされたと批判している。具体的に言うと、田氏は主に四つの

問題を指摘している。第一、テーマが大きすぎ、多くの事柄と関わるため、研究が反って浅くなっている。第二、各論文のテーマに重複するものが多い。第三、厳密かつ深く掘り下げた分析が欠けている。第四、「動態式」研究の成果に乏しい。なお、ここで言う「動態式」とは、政治制度を人間活動・事件展開の過程と有機的に結びつけた研究という意味で用いられている。孫氏も田氏に続き、明代内閣研究が停滞しているとして、そこには大別して二つの問題が存在するとする。第一、事実の客観的な記述のみで、理論的な分析に乏しい。第二、全体的な総論に止まり、中間的・具体的な議論に乏しい。孫氏はこれを、鄧小南氏の「活的制度史」をヒントに考案したと述べるが、田氏の主張とそれほど違うわけではない。

田氏・孫氏ともに「動態」という言葉を、制度史を人間活動・事件の推移と有機的に結びつけた研究という意味で用いている。こうした「動態式」研究の必要性は、すでに吳緝華氏によって提出されている。吳氏は内閣制度の研究が官員・品秩・職掌など百科事典的な記述に終始しがちな点を批判し、制度が出現した背景や政治への影響を踏まえて、「活的研究」を行うべきことを主張したのである。しかし、問題点は指摘されているけれども、実行が少ない。つまり、内閣の閣臣たちの行動の具体事例に即した検討となると、研究が進んでいるとは言えないのが現状である。内閣の制度上の権限以上に、皇帝からの信頼、兼任した官職の重み、閣臣自身の個性などさまざまな要因によって、彼らの実際の権力や行動が大きく左右されたことに、考慮が払われなければならない。

本論は「動態式」の研究方法を、閣臣李賢に用い、彼を中心に当時閣臣たちの政治活動に即して内閣政治の様相と変容を考察するものである。李賢、字は文達、河南鄧州の出身である。李賢は楊士奇・楊榮・楊溥（「三楊」）以後の閣臣を代表する人物として、天順元年（一四五七）から成化二年（一四六七）まで、英宗・憲宗二代の君主に仕えた。『明憲宗実録』が「正統以来、大臣の君を得ること、未だ賢の如き者有らず」と評するように、李賢が皇帝二代の信頼を得ていたことは疑いを容れない。

李賢は土木の変・奪門の変・曹欽の反乱などによって招かれた不安定な政局に直面しながら、明朝の中央政治に参加した人物であり、これまでも注目はされてきた。山本隆義氏は、李賢の吏部尚書の兼任が内閣の「首輔」の起源であるとし、譚天星氏は「李賢内閣」が吏部の人事権に干渉し、大臣の人選を左右できたことを指摘した。こうした見解が妥当であるかどうかは本論で検討するが、李賢が閣臣を務めた天順期（一四五七—一四六四）

の内閣は明代内閣政治史の重要な一環を成しているのは疑いないところである。

したがって、本論は天順期における内閣の機構の職掌や構成など制度上の考察に止まらず、李賢ら閣臣（徐有貞・彭時ら）が歴史事件において参与した具体的な政治活動（奪門功臣との闘争・人事権をめぐる内閣の動向など）に注目し、彼らが演じた役割や後世政局への影響、それから皇帝・宦官・他の大臣などとの協力・対立関係などを検討する。この作業によって最終的に天順期における内閣政治の変容過程を描き出し、李賢が維持・向上させた当時の内閣政治の歴史意義を明らかにする。

各章の考察成果は以下の通りである。

## 第一章 天順期における内閣政治の変容

奪門の変後、英宗が李賢ら閣臣の籠絡に成功し、奪門功臣石亨・曹吉祥および彼らの勢力を相次いで肅清し、閣臣たちも肅清行動への参加を通して政治的台頭を果たした。その一連の過程における李賢の政治手法に注目した。李賢の台頭には、口頭・書面形式で英宗に進言できたことが大きい。一方、内閣の同僚である彭時と呂原は皇帝の接触は李賢より少なく、政治決定に直接参加することができなかったが、李賢が内閣でのリーダーシップを確立しようとする、これに反発したから、結局閣臣たちの合議制が維持された。したがって、山本隆義氏が主張した閣臣間の序列化は存在せず、「首輔」も出現しなかった。また、譚天星氏のいう「李賢内閣」という概念も成り立たない。

## 第二章 明代天順期内閣政治の再考—『天順日録』に見る李賢と曹吉祥の関係を中心に—

まず、李賢の著述『天順日録』および『古穰文集』の成書の過程を明らかにした。『天順日録』は三巻からなり、もともと李賢の政治的な備忘録であり、娘婿の程敏政・長男の李璋による編纂の李賢の『古穰文集』に収録されることで、成化期（一四六五—一四八七）に初めて公刊された。これまで取り上げられてこなかった序文の内容から『天順日録』と『雑録』の文章に編集の手は加わっていないことが確かめられた。そのうえで、『天順日録』に記された宦官曹吉祥関連の記事を、『明実録』『彭文憲公文集』『呂文懿公文集』などの史料と比較・対照し、李賢と曹吉祥の関係を考察した結果、李賢が曹吉祥の悪行を隠蔽していることがわかった。李賢は曹吉祥の恩顧を受け、入閣にも彼の力が与っていたし、曹吉祥勢力の曹欽・曹鐸らとも良好な関係を構築したことが、かかる隠蔽を行わせたと考えられる。李賢は入閣後に英宗の信頼を得、吏部尚書王翱や兵部尚書馬昂と協力関係を築

き、人事権を掌握することに成功したが、それもやはり曹吉祥との提携があって成し得たことであった。さらに、曹吉祥の処刑後も、李賢は宦官裴当の支持によって錦衣衛に逮捕される危機を乗り越えた。このように、李賢を中心とする内閣は有力宦官の支持を受けたことによって、奪門の変以来の混乱した政局を安定化させたのである。

### 第三章 李賢の政治活動と正統～天順期の閣臣の人事関与

宣徳期（一四二六―一四三五）・正統期（一四三六―一四四九）と天順期の薦挙を比較した。閣臣楊士奇・楊榮・楊溥は特に正統期に方面官・御史等の薦挙の主導によって吏部の人事権を侵害し、激しい奔競の気風を招き、当時吏部にいた李賢自身も三楊の行為に対して不満を抱いていた。その後、御史の薦挙が中止され、吏部は方面官の人事権を回収したが、吏部の薦挙自体が非難的となり、正統期・景泰期（一四五〇―一四五六）には「会官薦挙」と「吏部自擢」という二つの方式をめぐる論争が絶えなかった。天順期に英宗と李賢は並推の推進を通して方面官人事の決定権を皇帝に帰属させたが、李賢は依然として薦挙に参加した。しかし、李賢は三楊ら以前の閣臣とは異なり、吏部尚書王翱・兵部尚書馬昂らの部院大臣との協調や朝廷の僉議公論を借りて自らの意向を実現した。彼が三楊のように専横によって批判されなかったのは、こうした人事での公平性の演出によるものであろう。その後、閣臣たちは薦挙のための大臣たちの共同会議に参加せず、皇帝が最終の人事決定を下す際に、吏部尚書・兵部尚書などの少数の大臣と共に、御前または内閣の中で商議し、薦挙された候補者の任命・昇進・罷免を左右する方式をとった。こうした方式は皇帝の支持を得、吏部・兵部の人事権侵害を非難されることもなかった。

### 第四章 李賢と吏部

以上三章を補充し、李賢の「内相」と吏部官という二つの側面を分析した。李賢以前の閣臣は「内相」として朝野に認められるに至ったが、六部・都察院などほかの中樞機構との間に上下関係は存在していなかった。しかし、李賢は吏部出身であることによって、吏部の人事に関与できた。したがって、彼は内相たるにとどまらず、国鈞を握るに至ったのである。

以上のように、李賢は皇帝の信頼・宦官の支持・部院大臣の協力などの要素によって、前代の内閣と比べ、内閣の中央政治における影響力を拡大させた。本論は、天順期の内閣

政治の具体変容過程を「閣臣と奪門功臣の闘争」「閣臣と宦官の相互関係」「閣臣と吏部の関係と人事権の行使」を通して跡付けてきた。内閣政治の発展はこれらの政局変動によって達成されたが、そのなかで李賢の政治活動こそが最も重要な役割を演じていたことが確認された。彭時が「近時典故」と述べたように、皇帝の信頼を得た有力閣臣（一人または数人）は、吏部尚書・兵部尚書など中枢機構の大臣の協力で人事などの国政を左右するという李賢が達成した政治様式は、後世から内閣政治の画期をなすものとして見られたのである。